
Chapter 1

1

ギリギリまで粘って、それでもしつこく五分おきに鳴る目覚まし代わりの携帯を握り締めながら、わたしはようやく起き上がった。頭に血が上っていない。それでもサブディスプレイに流れている二桁・コロン・二桁の数字を眺めた瞬間、跳び上がるようにベッドから降りる。

早めに目覚ましをセットしておいたような気がするけれど、気付いてみれば家を出たのはいつもと同じ時間だった。

入学式も終わって、今日から新学期。

初々しさとは無縁になってしまったこの制服。あの意味ではこなれてきた、って言えるのかも知れないけれど――。あの初めてリボンをつけたときの少し窮屈な感覚、そして緊張しながら校門をくぐったあの日。今でもはつきりと覚えている。

「おはよ」

家の前に出たところで、いつも通りのあいさつ。神谷つちが眠たそうな顔で立っていた。

「おはよ」

そうだ。初めて彼の制服姿を見たときも、何だか知らないひとのような気分になったつけ。まだ一年しか経っていないのに。ううん、もう一年経っちゃったんだ。

部室のドアを開けた瞬間、わたしは恐らくきよとんとした表情で立っていたのだらう、と思う。二歩

ほど後ろに下がって壁のプレートを確かめる。文芸部。間違っではない。

ううん？ 知らないひとしかいない、よ？

「あ、こんにちはー」

「……こんにちは？」

語尾上がりにこたえて、わたしは首をかしげた。

「おや水崎ちゃん」

ドアの陰からひよっこり顔を出したのは三年の恵那先輩。どうやら何か探し物をしていたみたい、だけど。どうしてメガネかけてるのに、おでこにもうひとつ乗っけてるんだらう。

「えーと？」

「あ、そうそう水崎ちゃんさ、入部届ってどこにあるか知んない？」

「えっと、こないだコピったのが緑ファイルに入ってたと思いましたよ」

「んー、と……おお、さすが」

ファイルから何枚かその書類を取り出した恵那先輩を見て。

そこで初めて、わたしは気付いたのだ。新入部員という未知の存在に。

「だいたい、唐突過ぎるんですよ」

「つてもなー。確かにいきなりふたりも入るなんてね。わたしもびっくりしたよ」

ことの顛末を聞いた榛原さんは、笑いながらぱたと手を振った。

「で、水崎ちゃんジコシヨった？」

「何ですかその珍妙な略語……って、そういえば忘れてました」

「やっぱしねー。わたしも去年、ああいう状況じゃなかったら完全に忘れてたと思うもん」

言われて思い出すのは、去年の今頃のこと。わたし

しが初めて、この部屋を訪れたとき。そこには榛原さんがいて、慌てて説明とわしてくれたんだっけ。

うん、そう。わたしも緊張してて、でもみんないひとで。

あー、そうか。わたしも先輩になっちゃうんだなあ。

「ん、まあそーいうことで、二年の水崎晶です。よろしくお願いしますね」

2

「弟？」

わたしの言葉に、神谷っちは弁当箱に向けていた視線を上げた。

焼きそばパンを啜えたまま、わたしは頷いて返す。

「ほーおお、はいひょいひいはほひ」

「食ってから話すといいと思うんだ」

「ほあい……、うん。最初に聞いたとき、びっくりしちゃった」

昼休みの屋上。

最近はどこでおひるを食べるのが、わたしたちの日課になっている。

理由なんてない、と思う。強いて言うなら——ここにいつもいたひとたちが、いなくなつたからだ。

ぽかーんと静かになつてしまった屋上は、何だか見えて微妙な気分になる。

「へー、トナミさんのねえ。似てんの？」

「うーん、似てる……っちゃん似てるのかなあ。言われてみればそんな気がする、くらい」

話題は新入生のこと。昨日は結局、全部で三人も入部希望者がきたらしい。